

令和5年度 第3回学校運営協議会 議事録

日時 令和6年2月26日(月) 13:30~15:00

場所 倉敷鷺羽高校視聴覚教室

学校運営協議会委員

| | |
|----------------------------|-----------------------|
| 池上 慶行 (LAND DOWN UNDER 代表) | 岩崎 秀子 (元小学校教頭) |
| 内部 誠治 (味野小学校長) | 尾崎 祐一 ((株) 児島技研代表取締役) |
| 洲脇 友彦 (PTA 会長) | 高木 浩 (児島支所次長) |
| 高田 尚志 (高田織物株式会社代表取締役) | 竹岡 浩志 (児島中学校長) |
| 藤井 昭佐 (元児島高校同窓会長) | 眞次 浩司 (倉敷市立短期大学教授) |
| 三村 直子 (校長) | |

事務局

| | | |
|-------------------|----------------|----------------|
| 中井 明德 (副校長) | 森光 淳郎 (教頭) | 山本 恭子 (事務部長) |
| 山村 寿彦 (教務課長) | 森 浩 (生徒課長) | 横山 洋平 (進路課長) |
| 小野 直美 (総務課長・普通科長) | 妹尾 幸浩 (図書厚生課長) | 三宅 哲也 (ビジネス科長) |

1 開会

2 会長挨拶

定員の確保が課題であるが、本年度の学校の取組についての説明を受けて、次年度の学校経営計画、スクールポリシー策定に向けて意見等をお願いしたい。

3 校長挨拶

本年度の一年間を振り返り、本校が改善していけるようにご意見ををお願いしたい。本校のスクールミッションは、多様な進路希望に応えるとともに、地域等と連携した課題解決型の学習の推進である。本年度は多様な取組ができた。児島しごと博を7月には3年次生就職希望者に実施し、3月2日には、2年次生全員に実施する予定である。また、様々な企業にご協力いただき、たこSUNカレーの開発や鷺羽山ハイランド活性化に向けた取組を行った。自己肯定感の醸成など成長はしているが、こうしたことと志願者数が結びついていない。地域や保護者の方は、何かをやっているからではなく進路を見ている。アピールできていないところもある。児島地域でどういう学校であるべきか。協議していただきたい。

4 報告等

- ・学校経営計画目標達成のための具体的方策最終評価について (各課長)
- ・学校自己評価アンケートについて (副校長)

5 質疑応答

6 協議

○学校経営計画について (校長)

学校経営企画の内外の環境分析についてご意見をいただきたい。

鷺羽高校の強み：地域と連携した課題解決型探究学習を推進し、三菱みらい育成財団の助成校になっていて、各種検定取得・コンテストで成果を出し「令和5年度岡山県教育関係功労者表彰」を受賞した。また、広報活動ではSNSを活用して積極的に行っている。生徒は意欲的な生徒が多い。

鷺羽高校の課題：定員割れが続き、令和6年度から4クラスとなる。生徒ともに教員も減少する。生徒は、学習習慣が確立していない生徒が多く、家庭学習ができていない。それから部活動の参加者が少なく、大きな問題である。

機会：地域の方に非常に協力してもらいたい。

脅威：児島地域の人口減少、それに岡山・倉敷中心部公立校や私立校へ行く傾向が強まっている。こうしたことを受けて、令和6年度の学校経営目標を策定した。

○スクールポリシーについて（校長）

育てたい生徒像は、学校経営計画と同じになっている。学びの内容・方法は、普通科ビジネス科ともに重視したい点を示している。求める生徒像は、中学校や社会に対するメッセージと考えてほしい。

委員からの意見等

- ・学校経営計画の中で、学校の課題として、生徒は家庭で学習をしない、部活動をしないということだが、どこで何をしているのか。

→スマホ・ゲームに時間を掛けているようだ。部活動に熱心に取り組む生徒もいる。部活動を通して自信をつけさせていきたい。

- ・小学校では図書の利用が少ないようだが、鷺羽では良い結果である。書籍が古いので購入を進めてほしい。教職員のアンケートで、過剰な勤務負担を感じている教職員の割合が多い。グローバルな鷺羽を続けてほしい。生徒が集まらないのは交通が不便だからであろう。

- ・課題は、高校だけでなく中学校の立場から言っても同じである。学習習慣も部活動も同じである。

- ・先生方の努力が保護者に届いていない気がする。学校行事にも保護者が参加できる様にしていくべきだ。教職員の数が減れば効率化を図っていく。学校だけでなく地域企業としても援助していくことが重要である。

- ・高校は課題が広いので、地域として考えていけないといけない。幼小中高の連携も計画に入れても良いのではないかと。高校が何をしているのか、発信の仕方など地元が知るように工夫が必要である。小高でも連携できた。互いに協力していきたい。

- ・地方の小中高は苦勞している。地元企業も同じようなところはある。ないものはない。あるものを活かし、ないものをつくる。たとえば、図書室で勉強している生徒の姿を発信する。伝統的なものも断ち切るか立て直していくことが必要である。

- ・地元の人口減少は必然。

令和6年度学校経営計画・スクールポリシーについて了承された。

7 その他

8 閉会 副会長挨拶